書評：羅福恵・朱英主編
『辛亥革命的百年記憶与詮釈』

櫻　井　良　樹

2011年は辛亥革命百年の記念年にあたり，中国（大陸・台湾）を問わず，日本でも多くのシンポジウムが開かれた。その成果は，徐々に公表されはじめている。ここで取り上げるのは，革命百年目の秋（革命は10月10日勃発）にさきだち革命発祥の舞台となった武漢で発行された革命百年にちなむ図書である。筆者が，この本を手にしたのは2012年初めのことである。第３巻の著者の一人である趙軍先生（千葉商科大学教授）を通じて羅福恵先生（華中師範大学教授）の好意によりいただいた。両先生に感謝の辞を申し上げたい。

本書は《辛亥革命百年紀念文庫》シリーズの内の４冊をしめるもので，一巻が500～600頁と，かなり分量のあるものである。総タイトルは『辛亥革命的百年記憶与詮釈』，つまり『辛亥革命百年の記憶と注釈』であり，各巻の構成は次のようになっている。

第１巻「政府，党派的辛亥革命紀念」(劉偉　等著)
第２巻「民間社会対辛亥革命的記憶与詮釈」(朱英　等著)
第３巻「歴史学者対辛亥革命的研究与詮釈」(何卓恩　等著)
第４巻「紀念空間与辛亥革命百年記憶」(陳蘊茜　等著)

一見してわかるように，これは辛亥革命の過程や影響を研究したものではなく，辛亥革命や孫文がどのように位置づけられてきた，あるいは位置づけられているかを，政府・民間社会・研究者そして記念物を通して見たものである。総論において編集にあたられた羅教授は，百年来の辛亥革命に関する歴史記憶をたどることは，革命そのものを研究するのと同等の重みを持つと述べている。たとえば政治との関係に限って述べても，革命後袁世凱が権力を握ると，革命直後から開始された記念化の動きに抑制がかかった。革命を「乱」とか「匪」とか見なしたのである。しかし北伐の完了後からは自らの政権の正当性を訴えるために「光栄の

歴史」とされ，満州事変以後の抗日運動と結びつけられて，記憶化は進む。革命中国建国の後も，孫文は革命の偉大な先行者として位置づけられ，辛亥革命50年を記念して一つの頂点に達し，学問的にも多くの成果が出され，その後の研究の基礎となった。文革期には，この動きはいったん低調となったものの，その後は復活して今日に至っている。いっぽう台湾では蒋介石・蒋経国時代には活発であったものの，李登輝・陳水扁時代には台湾史が重んじられるようになり，革命はまるで外国史のように扱われ，学界は別として一般社会では記憶は淡化される方向にあった。このように革命や孫文の思想をどのように評価するかということ自体が，その当時の社会や体制と関連していた。本書では，全巻を通じて，政治情勢，社会情勢，学術研究の各側面から革命がどのように位置づけられてきたのかを明らかにしている。材料は，一般的に使われるものだけでなく，教科書，文芸作品，墓祠，記念館・公園など各種にわたっている。

さて一巻ずつ紹介していこう。第1巻は「政府と党派の辛亥革命記念」であり，まさに上で述べた政治状況と辛亥革命記念の関係を扱っている。①民国初年期，②南北対峙期（袁世凱死後），③国民党・国民政府期（1928年以後），④戦前の共産党や他党派における，⑤1949年以後の大陸，⑥1949年以後の台湾を扱った章により構成されている。それぞれの時期の政府や党により，どのように観点から記念され（あるいは記念されず），記念物が立てられ，国慶節や記念活動が行われたのかというような考察が中心である。また辛亥革命そのものの説明の位置づけにも言及され，その他の記念日などとの関係にも及ぶ。①の民国初年期において北京政府が「共和」政治の観点（つまり清王朝の崩壊という観点）から辛亥革命を評価し，革命自体については記憶を淡化させようとしていたというのは面白い。さらに④では補説として孫文の遺志を継いだと称していた汪兆銘政権も扱っているが，同政権は日本の革命への支持の側面を強調していたことを指摘している。これも政治が歴史を利用した例となる。

第2巻は「民間社会の辛亥革命に対する記憶と注釈」である。民間社会というのは，具体的には，①工商界，②知識人，③キリスト教（宗教界），④華人・華僑，⑤マスコミ，⑥教科書，⑦文学芸術を指し，それぞれが

一章をなしている。①で工商界を取り上げているのは，革命がブルジョア革命であったか否かというような論点ではなく，もちろん革命中の態度や行動も述べられているが，むしろ革命後はあまり革命に対して良い記憶を有していなかったのが，双十節や商業広告を通じてかかわりが深くなっていく状況について1930年くらいまでを見たものである。⑥では教科書における描き方の変遷が小中高，あるいは大学の教材までもが取り上げられ説明されている。

第３巻は「歴史学者の辛亥革命に対する記憶と注釈」であり，時期的に① 1911～1926年，② 1927～1949年，③ 1949～現在，④ 1949年以後の大陸学界の動向，⑤ 1949年以後の台湾における，⑥日本における，⑦アメリカにおける，⑧その他の国における研究史を扱っている。③と④の違いは，前者は年代を追った論文紹介的なのに対して，後者では革命の性質や評価をはじめとする主題別の紹介の色彩が強い。⑧のその他はフランス，ロシアが中心。

第４巻は「記念空間と辛亥革命百年の記憶」であり，①国家が記念空間をどう定位したか，②革命領袖と孫文記念空間の普及，③墓地，④祠堂と記念碑，⑤記念館・展覧，⑥故居，⑦革命活動旧址，⑧日常生活と教育空間における，⑨都市の中における「中山」という名称，⑩露天革命博物館と武漢の発展，⑪台湾・香港とマカオ，⑫その他海外という章立てである。①は記念空間・記念碑をどのように政府が位置づけようとしたかの分析であるが，②以下は，中国各地および海外の記念物を紹介しており，ガイドブックとしても読める。⑧はタイトルだけではわからないだろうが，記念公園，記念亭，塑像や，地名や道路に革命記念名称を使用したもの（これがけっこう多い），革命にちなんだ学校や図書館名などを指す。ここにはどこの都市の中心にでもある中山路・中山広場はあげられていないが，⑨では中山記念空間と都市の文化発展について論じられている。⑩の露天博物館というのは耳慣れない語句だが，武漢は革命発祥の地ということで街（武昌，漢口，漢陽）全体が博物館的な意義を持っており，そのような歴史を持つ武漢が記念物をどのように取り込んで発展させてきたかを論じている。⑫は多くは日本，ついで東南ア

ジア，それに英米である。それにしてもよくここまで調べられたものだと感心する。第４巻を持って世界を旅行してもよい（実際にロンドンでやってみた）。

世界的に歴史の記憶化ということがテーマとなり，日本でも歴史記念日のイベントに関心が集まっている（たとえば佐藤卓己・孫安石編『東アジアの終戦記念日』ちくま新書，2007 年）。過去の歴史は，常に現代の意識によって支えられて，意味を持たされているということは，歴史を扱うものの常識と言っても良い。ひとつひとつのものは，ちっぽけな存在であるものが多く，それほど強く記念を意識させることはないかもしれないものの，辛亥革命，孫文その他革命運動にかかわった人たちの記念物・記念空間が，どのように中国大陸の各地に散在しているかが総体として明らかになったことは，とても意義のあることのように思われる。

中国各地の歴史文化遺産を訪問すると，しばしば史跡の入口に全国第〇批重点文物保護単位という石碑があり，さらに何枚もの金看板に，国家一級博物館，愛国主義教育基地，全国愛国主義教育示範基地，文明単位，先進単位，緑色景区，平安景区，青少年教育基地，国防教育基地とか，しばしば等級付けを伴って掲げてある場面によく出会う。国家等級旅游区 AAAA のように A の数で重要性を表しているものもある。第４巻で取り上げられている施設にも，そういうものがある（もちろん，そのような格付けのなされていないものまでが取り上げられているとろがすごいのだが），すると他の歴史文化遺産との関係性を問うことも必要なのかもしれない。多くの歴史の記憶化作業が続けられているわけだが，その作業の中における辛亥革命の位置ということについてである。

筆者は，いくつか海外で孫文関係の施設を訪れたことがあるが，細かく見ると，他にもこんなにもあるのかと驚かされた。そういう観点から言うと，第３巻⑥⑦で細かに紹介がなされている日本とアメリカの研究状況が，第４巻⑫で扱われている海外，特に日本とアメリカの記念空間にどのように反映されているかは興味のあるところであろう。第４巻⑫では，まず日本における孫文をはじめとする革命活動にゆかりの地がリストアップされ，次に記念館や記念物が残されているところについて細

かく説明されている。ここからは，現在に至る歴史の記憶化過程がわかる。世界の中では日本が，もっともゆかりの地が多く，その結果として革命家や孫文の足跡に関係する施設が残される結果となった。そしてその多くは華僑の人々だけではなく，民間人によって保護されてきたものである。

いっぽうアメリカでは，記念物は，ほとんどが華僑の多い土地に限られる。これは彼等が革命に資金的援助を行ったことによる。ハワイ，サンフランシスコ，サクラメント，ロサンゼルス，シカゴなどの記念施設が紹介されているが，たとえば孫文の軍事顧問となったホーマー・リーに関するアメリカの事跡には言及されていない（ホーマー・リーについてはLawrence M. Kaplan, “Homer Lea : American Soldier of Fortune”, The University Press of Kentucky, 2010参照）。やはり革命への関わり方が，日本のように華僑だけではなく朝野の人士に及んでいたところと，アメリカのような関わりが限られた遠い国とでは異なる。他方で日本の記念空間は，孫文や革命そのものを記念するものではなく，あくまでも「日本（日本人）の関わり」を記念するものであるという点で国内的なものであるとも言える。それは戦前には侵略を弁護する意味を持たされていたこともあろうし，現在では，しばしば緊張と摩擦に見舞われる日中関係を緩和する役割を持たされている。ホーマー・リーを顕彰することが，現在のアメリカ，および米中関係にいかなる意味を持ち得るのかは不明だが，それが必要ならいずれ記念化がなされるだろう。現に昨年台湾で行われた「孫中山先生とアメリカ」展（国父紀念館）は，半分がホーマー・リーに関する展示であった。これは純粋に革命百年記念行事であったかもしれないが，米台関係の観点に立った記憶化促進の動きだったかもしれない。

このように歴史の記憶は，常に現代を背負っているのである。すなわち世界各国・各地における記念物や革命の位置づけについては，まだまだ知られていないものがあるということだろう。しかしそれは別に不思議ではない。孫文と革命に関する各国の研究状況や思い入れが異なるからで，これから研究がますます深まり，辛亥革命と諸外国とのかかわり，

あるいは諸外国に与えた影響の位置づけがなされ，それを記念する活動が何らかの意味を帯びてきた時に，あらたな記念事業・記念施設は，まだまだこれからも登場してくることになろう。

羅福恵・朱英主編『辛亥革命的百年記憶与詮釈』全四巻（華中師範大学出版社，2011 年，380 元）

〔付記〕本稿は麗澤大学特別研究助成金（平成 24 年度）による研究「辛亥革命をめぐる日本と世界」による研究成果の一部である。